研究推進校事業報告書

＜取組と成果のポイント＞
〇授業の展開の仕方と板書のまとめ方を工夫し、「小東スタイル」として共有した。
→話合いの時間を十分に確保し、自分自身を振り返らせることができた。
〇対話活動に親しませ、授業の中にペアトークやグループトークを組み込んだ。
→応答や反応をしながら、自分の考えを積極的に伝え合えるようになった。
〇学びの足跡を教室に掲示し、各種通信を通して授業の様子を発信した。
→多面的・多角的な考えにふれて、考えを広げたり深めたりすることができた。

１　研究推進校の概要

学　校　名	所　在　地	電話番号	児童数	備考
豊川市立小坂井東小学校	豊川市小坂井町西浦 87	(0533)78-2271	568 人	

２　研究課題

⑴　考え、議論する道徳をめざした授業構想、発問、板書等の指導方法の研究
①　外部講師を招聘した計画的な授業研究会（年２回）を行い、発問により多様な考えを引き出せたか、対話活動により考えの広がりや深まりを支援できたか、授業を通して多面的・多角的な考え方に至ったかという視点で研究協議を行う。
②　板書計画を主にした授業案様式を用いて授業研究を行い、授業の流れと考えの関係性を視覚的にとらえられる板書の在り方を明らかにする。
③　道徳科の授業を核として、本校の特色を生かしたカリキュラムマネジメントによる別葉を作成し、その内容を吟味して検討を加える。

⑵　子供が自らの成長を実感し、意欲の向上につながる評価方法に関する研究
①　授業の終末に振り返りを書くことで、道徳的価値についての理解を促す。
②　振り返りを記入する道徳ノートをポートフォリオ化し、蓄積した振返りを見返すことで自己の変容を自覚させる。
③　子供たちがいつでも授業内容を思い出せるように、学びの足跡を教室内に掲示する。

⑶　地域・家庭との連携による道徳教育の取組の研究
①　日頃お世話になっている地域ボランティアの方々や、訪問学習先になっている給食センター、消防署の方に協力を依頼し、ゲストティーチャーやビデオレターで登場していただく。
②　地域の昔話や偉人を取り上げ、教材化する。
③　保護者が道徳の授業を参観する機会を設け、学校評価に反映できるようにする。

３　研究主題

研究主題名　「特別の教科　道徳」を要とした道徳教育の充実
―「考え、議論する道徳」の指導と評価 ―

＜主題設定の理由＞

「元気に仲よく よく遊び よく学べ」を校訓に掲げる本校は、人権教育を教育の根幹と位置づけ、その目標を「自他の人格を尊重する実践力ある子を育てる」としている。そのため、温かな人間関係づくりを大切にしており、帰りの会で友達のよいところを紹介し合ったり、週１回の異学年交流で教師も子供たちと共に遊んだりしている。同時に、全校体制で児童理解に努め、定期的ないじめアンケートや教育相談、子供たちの日記や振り返りなどを通して、子供たちの心の変化に敏感であろうとしている。また、人権教育の視点から、福祉実践教室や福祉施設への訪問活動を２年生以上のすべての学年で実施している。

子供たちの実態に目を向けると、元気で明るく、ユーモアがあり、教師の話を素直に聞いて学習活動に取り組もうとするよさがある。その一方、自分の思いを優先してしまい、友達とうまくかかわることができなかったり、自信のなさから自分の考えで行動できなかったりする場面が見受けられる。そこで、道徳科の授業を中心とする教育活動全般において、対話の場面を多く取り入れることにした。多面的・多角的な考え方を身につけさせることにより、道徳的価値についての理解（価値理解、人間理解、他者理解）を自分の経験と関連付けて学び取らせたいと考えたからである。さらに、本校の特色を生かしたカリキュラムマネジメント（別葉の活用等）によって、子供たちの主体性を引き出し、他者と認め合い、よりよく生きようとする姿勢を育てていきたい。

４　研究の概要

⑴　研究仮説

仮説Ⅰ　道徳科の授業やその他の教育活動において、対話の場面を多く設定し、様々な考え方にふれられれば、自分や友達のよさに気づけるだろう。

仮説Ⅱ　道徳科の授業を核として、本校の特性を生かしたカリキュラムマネジメントを行えば、児童の主体性が高まっていくだろう。

⑵　研究組織

３部会‥‥授業部会（対話を中心とした授業の実現のための手立ての研究）
地域教材部会（地域教材や地域性を生かした教材と指導事例の開発）
評価部会（児童の変容を明確にする評価の在り方の研究）

４ブロック‥‥低学年、中学年、高学年、特別支援
（授業案の検討、研究授業後の研究協議、実践のまとめ）

⑶　研究構想図

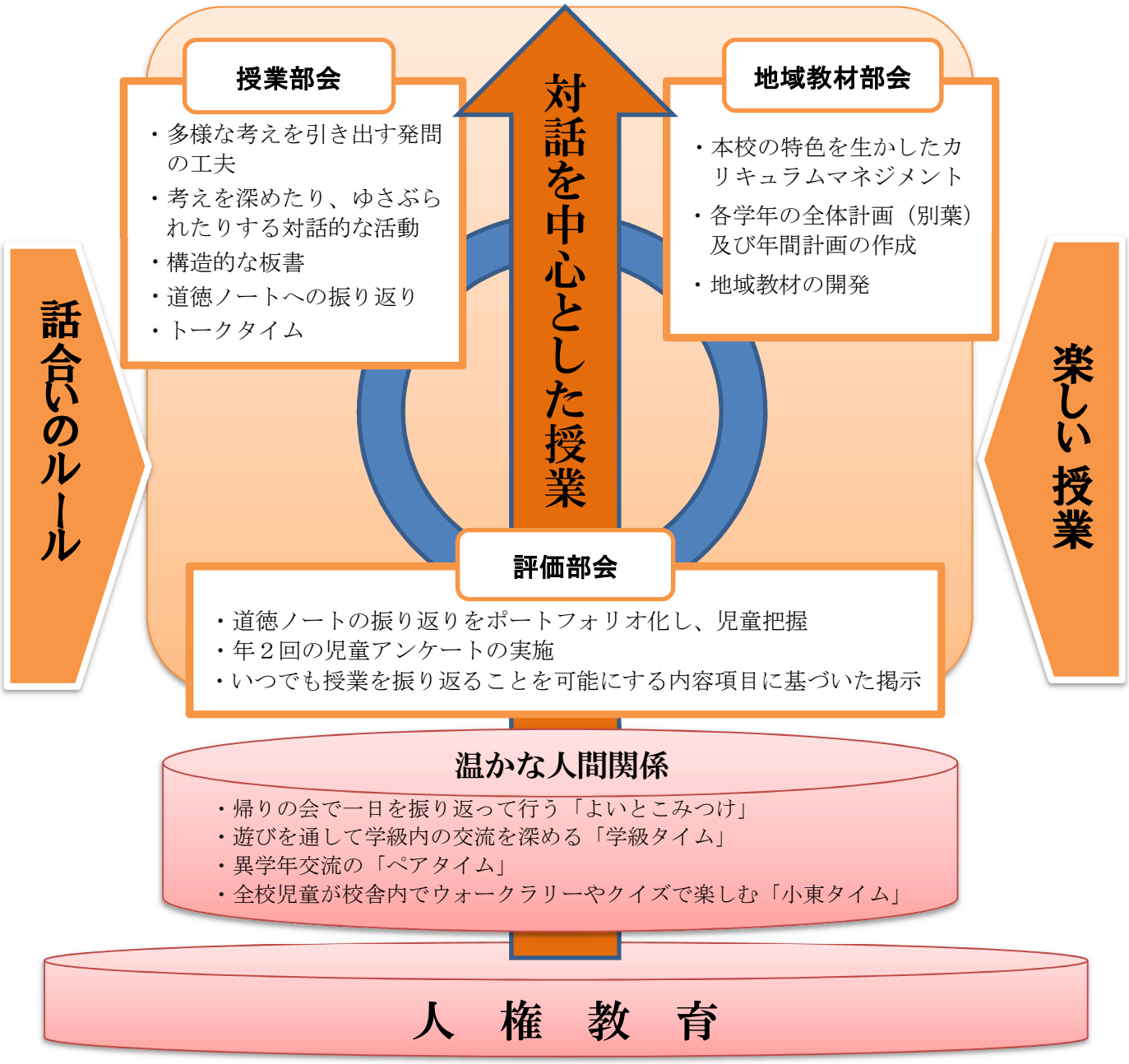
研究主題

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実

～「考え、議論する道徳」の指導と評価～

めざす子どもの姿

- 自分や友達の「よさ」に気づける子
- 学校生活をよりよくしていこうと自分から取り組める子



⑷　研究計画

<table>
<tr><th>学期</th><th>月</th><th>実　　施　　内　　容</th></tr>
<tr><td rowspan="3">１
学
期</td><td>４月</td><td rowspan="2">・研究概要の策定
・研究の方向性の共通理解、組織づくり
・校内道徳アンケート（２～６年生）
・授業実践と研究協議会の計画立案
・全体計画、別葉、年間指導計画の見直し
・授業案様式の共通理解
・継続職員による模範授業週間
○市教委学校訪問</td></tr>
<tr><td>５月</td></tr>
<tr><td>６月</td><td>◇児童意識調査①
◎全校研究授業（１年生）講師：帝京大学　赤堀博行先生</td></tr>
<tr><td></td><td>７月</td><td>・１学期の取組の振り返り
・校内道徳アンケート（１年生）</td></tr>
<tr><td></td><td>８月</td><td>・公開日授業案検討（低、中、高学年ブロック）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">２
学
期</td><td>９月</td><td>・一人一研公開期間（～１１月）</td></tr>
<tr><td>１０月</td><td>○市指導員訪問・道徳教育推進会議委員による視察
○市内研究発表会参加</td></tr>
<tr><td>１１月</td><td>◎全校研究授業（６年生）講師：帝京大学　赤堀博行先生
○研究推進校視察（犬山市立池野小学校）
○先進校視察（京都市立光徳小学校）
・中間報告書提出</td></tr>
<tr><td></td><td>１２月</td><td>◇児童意識調査②
・校内道徳アンケート（全学年）
・２学期の取組の振り返り
・研究紀要原稿作成</td></tr>
<tr><td rowspan="3">３
学
期</td><td>１月</td><td>◎授業公開・講演　講師：帝京大学　赤堀博行先生
○道徳教育パワーアップ研修参加
・事業報告書提出</td></tr>
<tr><td>２月</td><td>・研究紀要作成</td></tr>
<tr><td>３月</td><td>・成果と課題の確認、次年度の計画</td></tr>
</table>

※　４、５月は事業実施準備期間とする

５　研究課題にかかわる取組

⑴「小東スタイル」の定着をめざして

本校では、学級担任全員が同じ土俵で授業研究を進められるように、道徳の授業の展開と板書の仕方を「小東スタイル」として統一した。

「小東スタイル」のスタンダード化をめざして、今年度本校に異動してきた職員が本校の道徳の授業を実際に見て「小東スタイル」がどのようなものかを理解したうえで今年度の実践を積むために、１学期に「勝手に公開授業」、「第１回全校研究授業」を行った。

「勝手に公開授業」は、昨年度まで在籍していた職員が道徳の授業を授業案なしで公開し、その約２週間の公開期間中は道徳の授業を自由に参観することができるというものである。授業を参観した日の夕方の職員室では、授業者と参観者が授業について語ったり質問したりして、教師が主体的に道徳の授業づくりに取り組む土壌が形成されていった。

「第１回全校研究授業」は、本校在籍４年目の道徳教育推進教師が１年生「きんのおの」（しょうじきなこころで　Ａ（２）［正直、誠実］）の授業を行った。また、この研究授業には、帝京大学教授（元文部科学省調査官）赤堀博行先生を招聘し、授業の指導助言と「『特別の教科　道徳』で大切なこと」の講話をいただいた。本校のこれまでの研究の成果と課題を改めて明確にすることができた。

授業の展開と板書形式を統一したことで、授業の検討や検証を的を絞って行いやすくなった。授業者自身も子供たちの意見を整理しやすくなり、授業中に投げかける言葉が精選された。その結果、子供たちが話し合うための時間を十分に確保できるようになって、対話を中心とした授業へとつながっている。

⑵　授業づくりの力量向上をめざして

令和３年１１月５日（金）全校研究授業（６年月組）
主　題　法やきまりを守って　Ｃ（１２）［規則の尊重］
教　材　ここを走れば（出典　光村図書「道徳６　きみがいちばんひかるとき」）
ねらい　法やきまりを守るべきかどうか悩む場面について考えながら、法やきまりの意義を理解していくことで、自他の権利を守ろうとする道徳的判断力を育てる。

①　授業の様子

みんなはどうしてきまりを守るのですか

導入での問いに、「相手の人にも自分にも危険」「自分に罰がくる」「守るもの、常識」という発言があり、子供たちは守ることは当然という反応を示した。この後、高速道路の路側帯の写真を提示し、路側帯の説明をしてから挿絵を紙芝居のように見せながら教材を音読した。子供たちは教科書を見ずに聞くこのスタイルに慣れ、また一回の読み聞かせしかないことも理解しており、集中して聞くことができていた。

【資料を音読する教師】

お父さんが路側帯を走らなかったのを見て「ぼく」はどう思ったでしょう

教材の途中まで音読し、この発問をした。法やきまりを守るべきと考える父とは違う考えの「ぼく」の気持ちを考えることで、規則の尊重について多面的・多角的に考えさせる発問である。「他の車は通っているのに何で」「通れば早く会えるのに」「みんな通っているから少しぐらい」という意見が出た。導入の発問で、「法やきまりを守ることは当然。守らない人なんて信じられない」といった雰囲気の子供たちであったが、登場人物に自己を投影させたことで、法を守らない人の気持ちについて多面的・多角的に考える様子がうかがえた。

どうしてお父さんは路側帯を走らなかったのでしょう（中心発問）

教材を最後まで音読した後でこの発問を投げかけ、自分の考えを道徳ノートに書かせた。考えを整理し、まとめる時間を十分にとったことで、次のグループトークで活発な意見交換が行われた。子供たちはノートと筆記具を机の中にしまうとすぐにグループトークの隊形をつくった。グループの４人が自分の考えを一通り言い終わった後も質問し合い、互いの考えを深め合おうとする姿が見られた。こうした姿は毎週行ってきたトークタイムの成果であり、対話活動を重視して道徳の授業を展開してきた成果であると言える。子供たちがスムーズに動けることで時間のロスが減り、質問をし合うこともできて話合いがより充実したものとなり、考え、議論する道徳の授業につながっていった。グループトークに続いて、グループで話し合ったことをもとに学級全体での話合いを行った。「おじいちゃんが悲しむ」「将来自分の子供がまねをしたら危ない」「路側帯を走って事故などを起こしたら、救急車の到着が遅れてしまう」といった意見が出た。

【グループトークの様子】

お父さんの決断をどう思いましたか

客観的に子供たち目線で考えさせることで、自分とのかかわりで規則の尊重について考えられるようにするための補助発問を投げかけた。「えらい」と言った意見に対し、「どんなところがえらかった」と問うと子供たちは考え込んだ。そこで授業者はグループで話し合う時間をとり、学級全体で発表させた。「（おじいちゃんの）命がかかっているのに、あせらず周りの命を考えたことがえらい」「自分勝手な思いや子供が行こうって言ったのに守ったのがえらい」という意見が出た。これらの発言から、命の大切さと、きまりやルールを守る大切さを比べたとき、難しい選択であると同時に、自分のことだけを考えて判断することはよくないという考えに子供たちが至ったことが伺える。

きまりを守るよさって何ですか

本時の学習のまとめの発問である。「人に迷惑をかけない」「くらしの安全につながる」「後になって後悔しない」「みんなが気持ちよく過ごせる」といった意見が挙がり、道徳ノートに振り返りを書いて授業を終えた。

② 本時の板書

③ 参観者の感想、意見

・グループでの話合いは、とても鍛えられていると感じた。友達の意見を聞いて疑問に思ったことを質問して、理解しようとしていた。

・対話のとらえについて、「先生と発言者」、「先生と子供たち」の間にも対話があるべき。発言を受けた教師が問い返したり切り返したりして、子供たちの考えをさらに深めたい。

④ 赤堀先生の御指導

・中心発問の後、子供たちに十分に考える時間を確保したのが良かった。

・道徳の授業の組み立て方として、授業案に授業者の意図を明確にすることが大切。

㋐ 学習指導要領の各内容項目についての解説を読んで、授業者が子供たちに何を一番考えさせたいのかを明確にする。

㋑ 授業案の主題設定の理由に、授業者が子供たちに考えさせたい道徳的価値と子供たちになってほしい道徳性の様相、そして、これまで授業者が子供たちと接する上で本時の内容項目に関して大切にしてきたことを明記する。

㋒ ㋑が明確に定まると、本時のねらいが決まり、中心発問が決まってくる。中心発問が決まると、中心発問にせまるための発問も決まってくる。

⑶ 子供に役立つ評価をめざして

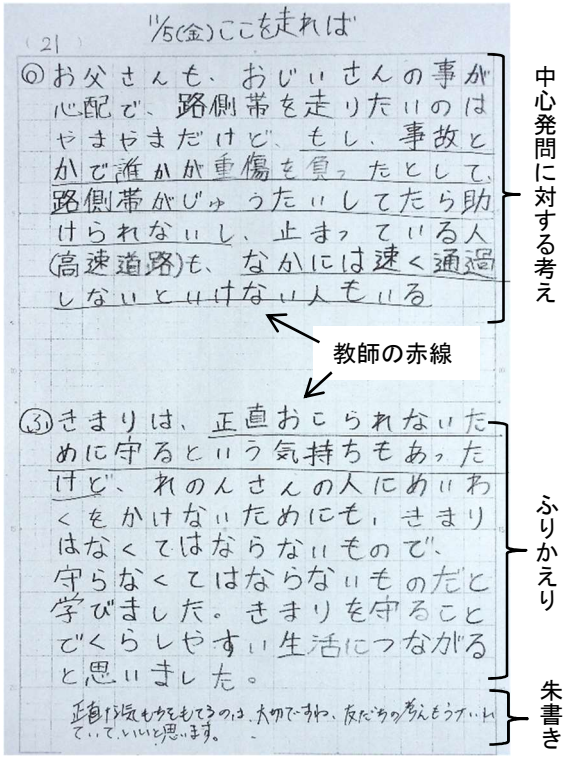
① 道徳ノート

授業では、どの学年も一人１冊の道徳ノートに振り返りを蓄積するようにしている。考えたり、話し合ったりする時間を少しでも多く確保するために、道徳ノートには教材名、中心発問に対する考え、振り返りのみを記述させている。

子供たちは、中心発問を投げかけられると、すぐにノートを取り出して自分の考えを書き始める。授業者はノートを見て回りながら、その子ならではの考え方や見方が表れている部分に赤線を引いて、自信をもって話合いに参加できるように後押しをする。続いてのペアトークやグループトークの際には、ノートは机の中にしまわせて、書いたことだけにとらわれない交流を促している。こうした方法を継続することで、子供たちは質問を交えながら、時間いっぱい意見を言い合えるようになってきている。

授業の振り返りは、資料の登場人物に自己を投影させた内容にとどまることなく、自分自身の生活を振り返って記述するようにさせている。子供たちは、みんなから出た意見を黒板で確かめながら、自分がめざしたいことや心がけていきたいことを具体的に記述できるようになってきている。しかし、授業によってはやや表面的な決意表明になってしまうことがあり、内容項目に関して現状認識を踏まえた振り返りを書けるようにしていくことが課題である。

教師は一人一人のノートに赤線を引き、朱書きを添えて、考えを深めたり、広げたりできたことを認め、考えるヒントを与えている。さらに、何人かの振り返りをピックアップし、板書の写真とともに学びの足跡として教室内に掲示している。

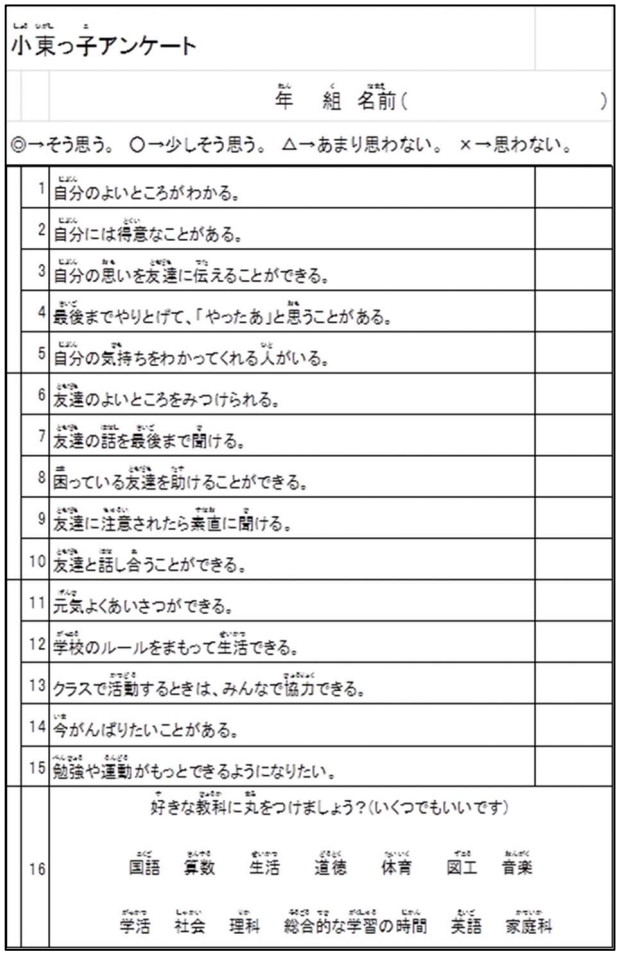


【道徳ノートの使い方】

② 児童アンケート

子供たちの意識の変容をとらえるために年２回の「小東っ子アンケート」を行っている。設問１から５までは友達と認め合うことについて（A）、６から１０までは友達と認め合うことについて（B）、１１から１５はよりよく生きることについて（C）問うものとなっている。回答の「そう思う」を４点、「少しそう思う」を３点、「あまり思わない」を２点、「思わない」を１点に換算した結果、どの学年でも３領域とも３．５前後の平均値となっている。２学期末には、１学期当初に比べてＢとＣの値に微増が認められた。

また、好きな教科を選ぶ設問１６では、道徳に丸をつける子供が全校の平均で４０％を超えている。特に２～４年生の割合が高まっており、考え、議論する授業の楽しさを味わうことができていると考えられる。



小東っ子アンケート

年　組　名前（　　）

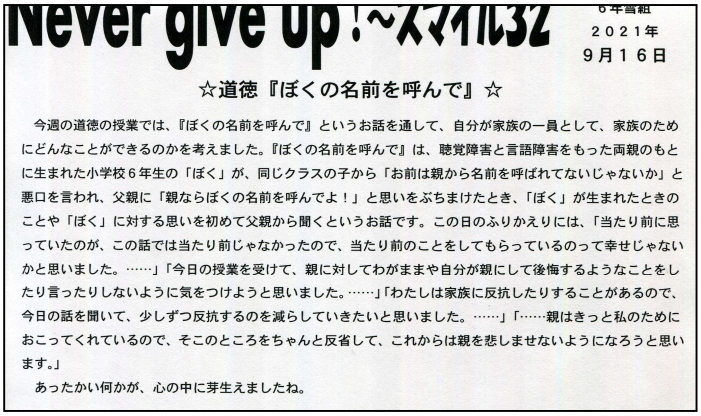
◎→そう思う。 ○→少しそう思う。 △→あまり思わない。 ×→思わない。

1	自分のよいところがわかる。	
2	自分には得意なことがある。	
3	自分の思いを友達に伝えることができる。	
4	最後までやりとげて、「やったあ」と思うことがある。	
5	自分の気持ちをわかってくれる人がいる。	
6	友達のよいところをみつけられる。	
7	友達の話を最後まで聞ける。	
8	困っている友達を助けることができる。	
9	友達に注意されたら素直に聞ける。	
10	友達と話し合うことができる。	
11	元気よくあいさつができる。	
12	学校のルールをまもって生活できる。	
13	クラスで活動するときは、みんなで協力できる。	
14	今がんばりたいことがある。	
15	勉強や運動がもっとできるようになりたい。	
16	好きな教科に丸をつけましょう？(いくつでもいいです) 国語　算数　生活　道徳　体育　図工　音楽 学活　社会　理科　総合的な学習の時間　英語　家庭科	

【学校独自のアンケート】

⑷　地域・家庭との連携

コロナ禍以前は、年に一度道徳の授業参観を行って地域や家庭に発信してきたが、コロナ禍により実施できなくなってしまった。そこで、今年度は校長室だより（全校通信）や学級通信を通して、道徳の授業の様子やその子独自の考え方が書かれた振り返りを積極的に紹介するようにした。


Never give up!～スマイル32

６年生組
２０２１年
９月１６日

☆道徳『ぼくの名前を呼んで』☆

今週の道徳の授業では、『ぼくの名前を呼んで』というお話を通して、自分が家族の一員として、家族のためにどんなことができるのかを考えました。『ぼくの名前を呼んで』は、聴覚障害と言語障害をもった両親のもとに生まれた小学校６年生の「ぼく」が、同じクラスの子から「お前は親から名前を呼ばれてないじゃないか」と悪口を言われ、父親に「親ならぼくの名前を呼んでよ！」と思いをぶちまけたとき、「ぼく」が生まれたときのことや「ぼく」に対する思いを初めて父親から聞くというお話です。この日のふりかえりには、「当たり前に思っていたのが、この話では当たり前じゃなかったので、当たり前のことをしてもらっているのって幸せじゃないかと思いました。……」「今日の授業を受けて、親に対してわがままや自分が親にして後悔するようなことをしたり言ったりしないように気をつけようと思いました。……」「わたしは家族に反抗したりすることがあるので、今日の話を聞いて、少しずつ反抗するのを減らしていきたいと思いました。……」「……親はきっと私のためにおこってくれているので、そこのところをちゃんと反省して、これからは親を悲しませないようになろうと思います。」

あったかい何かが、心の中に芽生えましたね。

【授業の内容を紹介する学級通信】

⑸　総合的な学習の時間と関連させた地域教材を使った道徳の授業

６年生の総合的な学習の時間では、「豊川・小坂井の昔話」というテーマで、子供たちが地元に伝わる民話や偉人について調べたことを紙芝居にして、１年生に読み聞かせをする活動を行っている。子供たちは、自分たちが住む町のことなので、とても意欲的に取り組み、新たな発見をするたびに自分たちが住む町に対して興味や関心を高めている。こうした興味関心の高まりを活かし、道徳の教育的効果を上げることをねらって、総合的な学習の時間と関連付けてるカリキュラムマネジメントを行った。

【紙芝居を読み聞かせる様子】

本時に地域教材として活用したのは、東三河地域で初めてとなる中学校を創設した竹本もとすぐの半生を描いたものである。もとすぐは成人した後、衰退してしまった家業の復興に努めた。その後、明治２年に設立された国府の修道館の学授員、明治６年に宝飯郡第１２大区権区長、明治９年に愛知県史生、明治１１年には宝飯郡長に任ぜられ、村人たちの自治改革に尽力した。本校の校区である篠束町の養蚕業の発展にも貢献した。その業績の中で最も大きいのが、宝飯中学校の創設であったと言える。もとすぐは人づくりを重視し、「学問をつとめ、物事をよく知るものは、貴人となり富人となる」と考えていた。しかし、設立に当たっては財政基盤がほとんどなかったため、その資金は郡内の人々の出資金に頼らざるを得なかった。当時、郡内の人々の生活は決して裕福なものではなく、その日その日を生活していくのに精いっぱいであった。そうした中でも、もとすぐは宝飯中学校の設立に向けて奔走した。こうした生き様にふれることで、自身の夢や目標を達成しようとする実践意欲を高めたいと考えた。

顔写真を提示して名前を伝えただけでは、子供たちはぴんとこない反応であったが、篠束と関係があることを伝えると、視線が熱くなったのが見て取れた。裕福な生活を送っている現代の子供たちが、当時の生活をより想像しやすくするために、庶民が食べていたとされる食事の再現写真を提示すると、子供たちは驚きとともに、当時の人々に自己投影させることに意欲を示していた。当時の困窮した村人たちや、未来の子供

たちのために奔走するもとすぐに自己投影させながら、苦難を乗り越えて自身の目標を達成することについて考えを深めることができた。

コロナ禍の影響で、以前のように地域の福祉施設への訪問やゲストティーチャーを招き入れることが難しい状況ではあったが、子供たちの対話活動の様子や振り返りから、地域教材として子供たちの身近な事象を扱ったり、他教科・領域と関連した教材を扱うことができるようにカリキュラムマネジメントを行ったりすることの有効性を感じることができた。

６　研究の評価

⑴　研究の成果

＜指導について＞

・日頃から「トークタイム」により対話活動に親しませ、道徳の授業ではノートを見ずに話し合わせることにより、子供たちが反応や応答、投げかけをしながら、自然に対話を続けられるようになった。

【板書とふりかえりの掲示】

・中心発問に十分な時間を割く授業展開の工夫を取り入れたことにより、ペアやグループから全体へ広げる話合い活動がより有効に働き、活発かつ多様な発言を引き出すことができた。

・共通の板書スタイルを軸にして授業案を立て、授業研究を行ったことにより、職員が同じ土俵に立って授業の検討、分析を行うことができた。また、講師の指導により、本時に一番考えさせたいことを明らかにして中心発問から構想していくという授業づくりの手法を学ぶことができた。

・授業案に「別葉より本時の位置づけ」という項目を設け、道徳の授業と他の教科や各種行事を双方向で関連付けることができた。

＜評価について＞

・道徳ノートに毎時間の振り返りと朱書きを蓄積することにより、自分の生活を見つめ直す目が育っていく変容が認められた。

・教室内の学びの足跡の掲示物が、様々な考え方に出会ったり、以前の授業内容と関連付けてたりして、多面的・多角的に考えることに役立った。

⑵　今後の課題と取組

・５、６年生では、グループトークのレベルが高まった一方、全体での話合いで意見の絡まりがまだ弱く、切り返しやゆさぶりなどの教師の出が課題である。

・道徳ノートへの振り返りに、今までの自分について記述をする児童がまだ少ない。現状認識をふまえて今後の自分のことを書けるようにしていきたい。

・各内容項目について、発達段階を踏まえた理解が十分とはいえなかった。重点内容項目を絞り込んで実践、検証をすることで、一層の授業力向上を図るとともに、家庭や地域との連携を強化していきたい。